

シリーズ 四国霊場を歩く(11)

阿波路から土佐路へ

－山海の難所・番所を越え、女人禁制の寺へ－



愛媛大学法文学部教授
四国遍路・世界の巡礼研究センター長
胡 光 (えべす ひかる)

阿波路を歩く

津屋崎村（福岡県福津市）の豪商佐治家一行7人が、江戸時代の弘化2年（1845）に行った四国遍路の記録「四国日記」（佐治洋一氏蔵、福岡県立図書館保管）を読み進めます。船で三津浜に上陸し、太山寺を打ち初めに四国を北上、55日で一周します。日記には、日々の歩いた距離、札所数、接待数、宿泊場所、費用、食事などが詳細に記録されており、阿波路に入って11日目をつかえました。新野村（阿南市）の百姓家を出発し、同村内にある二十二番札所平等寺へ向かいます。

弘法大師の奇跡

4月15日、平等寺には、大師堂・地藏堂・十王堂などがあり、一段高くに薬師如来を祀る本堂がありました。現在、本堂には大正12年（1923）高知県の筒井林之助が奉納した箱車が保管されています。箱車とは、いざり車とも呼び、足が不自由な方を乗せて運ぶ台車です。父が車を引き、ここまでたどり着いた親子は、弘法大師が湧かせたという霊水を飲みながら滞留したところ、足が立ち、箱車を



箱車がある二十二番平等寺

奉納したというのです。

箱車の奉納は、多くの四国霊場に見られましたが、現在ほかには、四十四番大宝寺（愛媛県久万高原町）・五十七番栄福寺（同県今治市）・八十八番大窪寺（香川県さぬき市）に残るのみとなっています。しかし、四国霊場や写し霊場以外の寺院でこのような事例は報告されておらず、弘法大師の奇跡を伝える四国遍路の特徴となっています。

先へ進むと月夜村に大師の加持水がありました。大師が闇夜を照らすために月を呼び寄せ、民のために清水を湧かせたものです。現在も月夜御水庵があり、奇跡を伝えています。

次の二十三番札所薬王寺（美波町）もその名のとおり、大師が彫ったという薬師如来を本尊として、厄除け・無病息災を祈る寺として有名です。同寺にも「瑠璃の水」が湧き大師像が祀られており、この地域の霊水伝説の一翼を担っています。

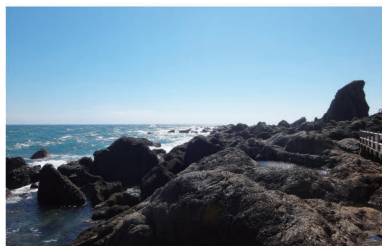
阿波最後の札所で無病息災を祈ったはずですが、佐治氏は癰（しゃく・内臓の痛み）に悩まされ、日和佐町（美波町）と牟岐町（牟岐町）で宿をとり休みます。

国境を越える

4月18日、ようやく出発して、国境へ向かいます。穴喰浦（徳島県海陽町）の阿波番所では、日付を書いた切手を納め、山を越えた甲浦（高知県東洋町）の土佐番所では、往来手形を見せて、切手もらい、甲浦の商人宅に泊まることができました。讃岐・阿波国境では詳細な記述

はないので、阿波・土佐国境の詮議が厳密だったと思われます。翌日通った野根村にも番所があり、改めを受けています。

阿波から土佐への道は、八坂八浜と呼ばれ、山海の難所が次々に登場します。



御厨人窟前の奇岩と太平洋

土佐の海岸線には、現在のような道はなく、三里（約12km）もの間、飛石・はね石・ごろごろ石という荒磯の難所を通りました。疲れて休み、狂歌を石に落書きしています。崎浜の百姓伝七宅に宿を借りました。

阿波から土佐にかけての道沿いには、たくさんの茶屋が記録されていて、休憩や昼食には困らなかったようです。茶屋で出た食事は、梅干し・煮しめ・豆腐・筍・切干大根・木耳・吸物・味噌汁などでした。昼食のことを「御わけ」と呼んでいます。

女人禁制の寺

4月20日は大雨のなか、室戸の東寺を目指します。途中、洞窟や権現を通りますが、弘法大師が悟りを開いた御厨人窟（みくろど）という認識はないようです。

室戸岬の東西に、二十四番札所東寺（最御崎寺）と二十六番西寺（金剛頂寺）があり、両寺の聖域は江戸時代、女人禁制でした。女性は山に登れないため、前札所で分かります。両寺の間に、二十五番津照寺があります（いずれも室戸市）。一行は、二日にわたってこの三か寺を参



室戸岬に建つ二十四番最御崎寺

詣し、東・西寺に参る際には、男女に分かれています。

西寺に行く途中、「女札所は左、本道は右也」と書いた道標が記録されています。真念のガイドブックにも紹介された貞享2年（1685）銘の入った立派な道標は、西寺の女人結界を記し、遍路道標としても最古のものです。

東寺（最御崎寺）には、弘法大師と母玉依御前の伝説も残っています。修行中の大師を母が訪ねてきたところ、火の岩が降ってきたため、大師が岩をねじ伏せたという洞窟があります。男性の修行場から女性を排除する修験道の思想が大師の奇跡として伝わっているのです。

四国霊場における女人禁制文化の継承は、元は札所とされる石鎚山を除けば、室戸の事例だけです。六十五番札所三角寺（四国中央市）は血の穢れを浄化する「血盆経」を配り、その奥之院仙龍寺は女人高野として信仰を集めていました。真念のガイドブックを読んでも霊場全体では女性を受け入れており、日記や絵画などの史料からは多数の女性遍路の姿がうかがえます。

かつての女性へのまなごしを伝える道標は、歴史の証人として、今でも遍路を見守っています。



二十六番金剛頂寺の結界を示す最古の遍路道標

【参考文献】

伊予史談会『四国遍路記集』伊予史談会双書、1981
塚本明・近藤浩二・胡光「巡礼と『道中日記』の諸相」『2013年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会、2014
愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』ちくま新書、2020
愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路と世界の巡礼（上・下）最新研究にふれる八十八話』創風社出版、2022・2025